

目次

序論p1

第1章 Wiki とは何かp2

1-1 Wiki の歴史p2

1-2 オープン Wiki サイトの現状p4

1-3 クローズド Wiki サイトの現状p7

第2章 Wiki サイトの問題点p9

2-1 コンテンツ保護の脆弱性p9

2-2 相性の悪い用途p12

第3章 問題点の検討p13

3-1 脆弱性への対処p13

3-2 Wiki サイトの利用用途の考察p18

結論p23

序論

コンピュータとネットワークの発展により生まれたインターネット技術は、瞬く間に我々の生活に無くてはならないものとなった。世界中でインターネットが普及し、高速回線のインフラも多くの地域で整いつつある近年、インターネットを通じてウェブ上で共同作業や議論を行うことの需要が高まってきたのは当然のことであった。そして、そのウェブ上での共同作業を実現するために誕生したシステムが Wiki である。

Wiki は正確には WikiWikiWeb サーバーコンセプトの意だが、大抵の場合は略して単に「Wiki」と呼ばれている。Wiki は自由に拡張することができる、連結しているウェブページの集合体で、情報を格納したり、あるいはその情報を修正するためのシステムの名称であり、ウェブブラウザを使って編集と修正を行う、一種のデータベースなのである。この Wiki を使用することによって、先に述べたインターネットを通じてのウェブ上での共同作業を誰でも行うことができるようになる。さらに Wiki は入力のインターフェースに既存のウェブブラウザを使用しており、他に追加のアプリケーションなど、余分なものは一切必要とせず、インターネットを使えるユーザーになら誰にでも容易に閲覧と編集をすることが可能になっている。編集などの Wiki サイトの操作は、非常に視覚的且つ感覚的に行うことができ、誰にでも容易に利用できるという点をさらに強調している。さらに Wiki は独自のマークアップ構文をもっており、Wiki が扱う文書はこの構文に沿って記述され、そのまま文書のファイルとして保存される。そしてユーザーが文書を閲覧するときには、文書に書かれているマークアップは Wiki のプログラムによって適切な HTML 形式に変換される。そのためユーザーは変換された

HTML ファイルを閲覧することができるのである。この Wiki のマークアップ言語は、HTML 言語と比べても非常に簡単なつくりになっているので覚えやすく、HTML の知識がないユーザーでも Wiki が簡単に利用できるようになってきているのである。このマークアップ言語を利用して、Wiki サイトではコンテンツ間、あるいは別のサイトにリンクを張ることができ、コンテンツ間の関連性を強くしている。

このように「インターネットを利用可能なユーザーなら誰にでも簡単に扱うことができるウェブ共同作業ツール」という点が他の共同作業用ツールと Wiki の一線を画す特徴であり、Wiki がコラボレーションツールと呼ばれる所以でもある。しかし、長所には必ず欠点が内包されているものであって、その点においては Wiki も例外ではない。Wiki は多くの長所とともに多くの欠点をも併せ持つ発展途上のツールなのである。

第 1 章 Wiki とは何か

Wiki の問題点を取り上げ、論ずるには、Wiki の歴史と現状を理解しておく必要があるだろう。この章ではそういった予備知識を解説していく。

1-1 Wiki の歴史

Wiki 技術を利用したインターネット百科事典「Wikipedia」の Wiki のページ(<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wiki>)の歴史の項によると、1994 年、デザインパターンの共同体で、パターン言語を書くために最初の Wiki のソフトウェアが作られたとある。そのソフトウェアは

Poatland Pattern Repository という名前で、Ward Cunningham によって製作された。その後 Ward Cunningham は現在で言う Wiki の概念を確立し、Wiki という名前を与えたのである。ちなみに WikiWiki とはハワイ語の状態動詞で、「素早い」とか「形式ばらない」という意味でよく使われている言葉である(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」p16)。その語意通り Wiki が非常に有用な技術であり、特に共同作業の場を開発するのに有用である。という事実は、Wiki が確立されてからの数年で広く認知されることになった。

そして 2001 年 1 月に現在において最も有名で規模の大きい Wiki サイトであるウィキペディア(http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page)が誕生することになる。ウィキペディアとは Wiki 技術を利用したウェブ百科事典といえるものである。ウィキペディアは何でも百科事典の記事にするという点において、他の Wiki とは少し趣が異なる。なぜなら他の多くの場合、Wiki は非常に専門的な内容だからである。ウェブ百科事典は、Wiki の誰でも簡単にコンテンツを閲覧、編集できるという点において非常に相性がよく、Wiki 技術を利用して作られたウィキペディアはこの数年、世界中で爆発的な成長を遂げた。現在では世界中で 140 を越す言語でウィキペディアが作成されているのである。そして今では日本の大手ニュースサイト「Yahoo! ニュース」(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl>)でもニュースに出てくる人物名などの解説のため、個別にウィキペディアのコンテンツにリンクを張っている場合がある。そしてそれに伴って上がった知名度のおかげで、Wiki というのはウィキペディアというウェブ百科事典のことだと思っている人も少なくないようである。しかしウィキペディアは Wiki 技術を利用した Wiki サイトのひとつであり、Wiki というのはウェブブラウザを使

って編集と修正を行うことができるシステムの名称だという事を一応再確認しておきたい。

2-2 オープン Wiki サイトの現状

現在、一番規模が大きい Wiki はやはり、非営利団体ウィキメディア財団によって運営されている、英語圏版ウィキペディア (http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page)であろう。そして日本語版ウィキペディアのページ (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>) も同じように近年規模を拡大しており、日本での知名度も相当なものになってきている。ウィキメディア財団によって運営されている Wiki はウィキメディアプロジェクトという名前で展開しており、ウィキペディア以外にも、辞書作成プロジェクトのウィクショナリー (<http://ja.wiktionary.org/wiki/>)。教科書や解説書を作成するプロジェクトのウィキブックス (<http://ja.wikibooks.org/wiki/>)。名言、格言集を作成するプロジェクトのウィキクォート (<http://ja.wikiquote.org/wiki/>)。著作権フリーの文書を集積するウィキソース (http://wikisource.org/wiki/Main_Page)などの姉妹プロジェクトが現在進行中である。

Wiki のサイトを構築して運営するのはもちろんウィキメディア財団のような専門的な組織だけとは限らない。特別コンピューターに精通しているわけではない組織、あるいは個人でも Wiki のサイトを構築して運営することができるのである。そのことはインターネットで検索することによって見つけることができる、Wiki サイトの数や内容の多様さからも伺うことができるであろう。あまりの数の多さゆえ現在 Wiki の

サイトがいくつあるのかは正確に調べることは不可能に近いが、参考までにインターネット検索サイトの google(<http://www.google.co.jp/>) で「Wiki」の検索ワードで検索してみたところ、約 28,300,000 件が検索に引っかかった。日本語のサイトだけを検索しても、約 1,520,000 件のページを見つけることができる。もちろんこの検索結果のページひとつひとつが個別の Wiki サイトなわけではなく、インターネット上にある「Wiki」という文字列の数を示すものだが、Wiki のインターネットへの浸透率の高さを裏付けるものであることは間違いないだろう。

インターネット検索で見つけることができる Wiki サイトの多くは、インターネットを利用することができる人なら誰でも利用できるという意味で、オープンな共同作業の場ということができる。そしてその用途は Wiki の柔軟性の高さゆえ多岐にわたっているが、Wiki の用途としては大きく二種類に区別することができる。

ひとつは Wiki を意見交換や議論の場として利用する、インターネット上でのコミュニケーションツールとして使われている Wiki。そしてもうひとつはなんらかのデータベースを完成させようとする目的のある、不特定多数のインターネット利用者をまとめ、データベース製作のためのナレッジベース（知識の基地）としての役割を果たしている Wiki である。

ただこの二つの区別は非常に曖昧で、コミュニケーションに使われている Wiki でも、そこに書き込まれるユーザーの意見というデータをデータベース化しているという側面も持ち合わせている。少しわかりにくいかもしれないので、本についての感想や意見を交換するための Wiki を具体例に挙げる。

その Wiki は誰でも自由に閲覧、編集ができるという Wiki の原則に従

い、各々が自由に感想や意見を書き込み、または他の人の意見を閲覧することができる。ここまでは Wiki 登場以前にもあった、他のインターネットコミュニケーションツール、例えば掲示板やメーリングリスト（Wiki 以外のインターネット共同作業ツールについては詳しく後述する。）と似たようなものと言える。

しかし Wiki の場合は、それらの書き込み、すなわち記事に、この Wiki の場合なら著者名や著書名、その他諸々の属性を付加し、構造化することができるのである。構造化することによってそれらの書き込みはデータベースを形成し、A という著書に対する感想のみを閲覧したい、という時に「B 著者の A 著書」と Wiki サイト内で検索をかけて、目当ての記事を簡単に素早く見つけることができるようになるのである。この場合「A 著書」という文字列を検索するわけではなく、記事に付加された属性を検索することによって、間違いなく A 著書に対する記事を見つけてことができるのである。このように構造化されたデータベースを検索することは、単なる文字列検索よりも遥かに精度が高いことは、インターネットをよく利用しているユーザーなら誰もが身にしみている事だろうと思う。

これが「ユーザーの意見をデータベース化している」ということである。そしてふたつめの、データベース製作のためのナレッジベースとしての役割を果たしている Wiki にも、コミュニケーションツールとしての側面が少なからずあると言えるだろう。多くの人間が集まってひとつのデータベースを製作する際に、互いの意見の衝突が全く起こらないことは非常に考えにくく、よりいいもの、完成度の高いものを作るためにも、コミュニケーションは欠かせないものである。また、互いに意見を述べるのではなく、他人の書いた記事を一方的に修正することであって

も、一種のコミュニケーションとすることができる。さらに、同じ Wiki サイトのコンテンツ間にはリンクが張りやすくなっており、高度にお互いが関連しあったコンテンツを作成することができ、この特徴も一種のコミュニケーションといえる。このような特徴からも Wiki は、最初に述べたように、コラボレーションツールという呼び名がふさわしいと言えるだろう。

3-3 クローズド Wiki サイトの現状

今までに述べてきたように、Wiki の大きな特徴のひとつとして、インターネットなどで誰でも利用できるオープン性が挙げられるが、全ての Wiki サイトが必ずしもそうであるというわけではなく、ある程度閉鎖された空間においても Wiki が利用されていることも忘れてはならない。この閉鎖された Wiki サイトのことを「クローズド Wiki サイト」と呼ぶことにする。ここでいう閉鎖された空間とは、限られた特定の人間のみで共同作業を行う場のことである。代表的な例を挙げるなら、それは大学と職場（会社）である。

オープンな共同作業とアイデアの交換が自然に行われ、なおかつそれが重要なのが大学です。Wiki の技術はこうした環境に適したツールです。

(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p367)

現在、このことを裏付けるように大学の研究室の Wiki はインターネット上で数多く見かけることができる。検索サイト google で「Wiki 研究

室」で日本語のページを検索しただけでも、多くの大学研究室の Wiki サイトを発見することができる。このような研究室の Wiki サイトはインターネット上で、誰にでも閲覧できる点はオープンな性質を持っているが、編集などの更新はその研究室に属している人間にしかできない場合が多く、それ以前に基本的に研究室員以外の人利用は想定していないという意味で（もちろん例外は存在するが）ある程度閉鎖された共同作業空間といえることができるのである。

次に企業の Wiki についてだが、企業によって運営されている Wiki の規模や現状などを詳しく把握することは非常に困難である。

企業における Wiki や Wiki クローンの利用状況を把握するのは困難です。当然ながら大抵の場合、そうしたものは外からアクセスできないファイヤウォールの背後で特定のグループにより利用されているからです。またその利用の多くは、聞くとところによれば非常に課題 指向なものであるということです。そのため、グループによる作業、プロジェクトが終了すれば、多くの場合 Wiki の媒介としての役割も終わります。

（「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p389）

こう述べられているように、企業で使われている Wiki は、そのほとんどがオープンなサイトではないからである。企業の Wiki サイトは外から一般のユーザーがアクセスできないようになっている場合が多く、それらのサイトはイントラネットの内側で、職員のみが利用しているので、一般のユーザーはその状況を知ることは難しいのである。そしてそれらの Wiki サイトは、プロジェクトの開始と同時に構築され、プロジ

ェクトの終了とともにその役目を終えるといったように、ひとつのプロジェクトにつき、ひとつの Wiki サイトを利用する、といった使われ方をしているようである。

しかし、企業の運営する Wiki が少なからず存在することと、その多くがグループによる共同作業やプロジェクト遂行のためのコミュニティツールとして利用されているということは間違いのないのである。

第 2 章 Wiki サイトの問題点

Wiki の歴史と現状を理解した上で、ここからは Wiki の問題点を論じていきたいと思う。そしてその問題点は、いくつかの Wiki サイトを観察することで発見することができるのである。

2-1 コンテンツ保護の脆弱性

序論であった Wiki の説明に「インターネットを利用可能なユーザーなら誰にでも簡単に扱うことができるウェブ共同作業ツール」というものがある。同じように「インターネットを使えるユーザーなら誰にでも容易に閲覧と編集をすることが可能」とも述べた。インターネット上に存在する多くの Wiki サイトは、その原則に基づいて運営されている。例えば前章でも紹介したウィキペディアのページでは、ウェブ百科事典の製作を目的に、誰にでもコンテンツの編集を許可している。そして他の Wiki サイトにも同様のことが言えるのである。以下に実例としていくつか日本語の Wiki サイトを列挙する。

- ・「Wikipedia」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- ・「Tex Wiki」
(<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texwiki/>)
- ・「書体関係 Wiki」(<http://wiki.fdiary.net/font/>)
- ・「PlamoLinux Wiki」(<http://plamo.linet.gr.jp/>)

実際に利用してみればわかるが、これら全ての Wiki サイトが誰にでもコンテンツを自由に編集できるようになっている。ここで問題点となるのは「誰にでも」というくだりである。この場合の「誰にでも」とは、すなわち、それがたとえ悪意を持ったユーザーであっても自由に Wiki サイトを編集することができる。ということも意味していると言えるのである。ここでの悪意を持ったユーザーというのはウェブサイトを攻撃する意思のあるユーザーのことを指す。

もし悪意あるユーザーがインターネットでオープンな Wiki サイトを攻撃しようと思ったとき、その攻撃は他の Wiki ではないウェブサイトを攻撃するときと比べて、遥かに簡単に行うことができるのである。なぜなら Wiki サイトはそのコンテンツのほとんどが、誰にでも編集可能であるため、完成した記事を支離滅裂な記事に変換したり、全く意味のないコンテンツを追加するだけでも、Wiki サイトには損害を与えることができるからである。コンテンツが簡単に編集できるがゆえに、攻撃の際にインターネットやコンピュータの専門的な知識も必要としないのである。このような悪意あるユーザー、またはその行為のことを、インターネットコミュニティでは「荒らし」と呼んでいる。以下にウィキペディアに掲載されている荒らしの定義を抜粋する。

荒らし（あらし）とは、チャットや電子掲示板、Weblog など計算機ネットワークにその目的に適合しない投稿を連続して行う人または行為をいう。多くは悪意からなされ、その場の議論・コミュニティを破壊することを直接の目的とする。ネット上のマナー違反とされる。悪質性が高いと判断された場合、犯罪として扱われる事もある。英語では vandal（vandalism）という。

（「ウィキペディア - 荒らし」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%92%E3%82%89%E3%81%97>）

もともとインターネットでは、悪意を持ったユーザーの悪行が問題視されていた。インターネットのオープンな Wiki サイトは、長所であるはずの柔軟性ゆえに、悪意あるユーザーの被害を非常に受けやすいという点を問題点のひとつとして挙げる事ができるのである。

また、悪意のない普通のユーザーが Wiki サイトに同様の問題を起こす可能性もある。例えばユーザーが記事を改正したつもりが、ユーザーの勘違いや無知ゆえに改悪してしまうといった事態も、Wiki サイトにとっては損害であり、問題だといえることができるだろう。

また、このことは改悪したときだけとは限らないが、修正後に修正前の記事を開覧したいという事態も度々起こるだろう。このような事態にどう対処するかも問題点のひとつにあげることができる。

このようにオープンな Wiki サイトは常にコンテンツ破壊などにより、有意義なコンテンツが開覧できなくなる危険にさらされているといえる。このようなコンテンツ保護の脆弱性が Wiki サイトひとつの問題点である。

2-2 相性の悪い用途

次の問題は、Wiki の性能全般の問題である。現在 Wiki は、高い柔軟性と応用性の為、非常に多くの用途に利用されている。しかし、あまりに多岐にわたって利用されているために、Wiki が完全に問題なく機能しているサイトもあれば、そうでないサイトも多く存在しているのである。Wiki 本体をシンプルかつ軽量にするために、Wiki 本来の機能は基本的なものだけに抑えられている。そのため、サイトによっては、Wiki 本来の機能だけでは要求される機能を満たせない場合もあるのである。つまり、Wiki の用途には向き不向きがあるということが言えるのである。

誰もが Wiki を必要とするわけではありません。誰もが Wiki を欲しているわけではありません。あらゆる状況が、オープンな議論・共同作業フォーラムにすれば恩恵を得るをいうわけではないのです。

(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p35)

同じように「Wiki を利用する際に入力のインターフェースに既存のウェブブラウザを使用しており、他に追加のアプリケーションなど、余分なものは一切必要としておらず、インターネットを使えるユーザーになら誰にでも容易に閲覧と編集をすることが可能になっている。」という点の裏にも問題点が隠されている。大事なのは Wiki の利用には既存のインターネットブラウザだけが必要で、他の余分なアプリケーションは必要ない、という事実である。言い換えれば Wiki は、独自のインタ

ーフェースではなく、既存のインターネットブラウザをインターフェースに利用することによって、多くの人に簡単に利用してもらうという点を重視しているため、結果的に既存のインターネットブラウザの性能内に機能が抑えられてしまうといった問題点があるのである。

第 3 章 問題点の検討

3-1 脆弱性への対処

ここからは、二章で述べた問題点を検討していく。まずは、Wiki サイトにおけるコンテンツ保護の脆弱性についてである。

人為的なコンテンツ破壊の原因には大きく分けて二種類あることは前述したとおりである。それはすなわち、悪意のある人間が意図的にコンテンツを破壊することと、悪意はないが、勘違いやミスでコンテンツを破壊してしまう場合の二種類である。

ここでいう、勘違いやミスでコンテンツを破壊してしまう場合というのは、具体的に言えば、前述したウェブ百科事典ウィキペディアで、何かの記事をもともと書かれていた内容で完璧な記事であったものに、間違ったことが書かれていると勘違いして改悪してしまったり、編集時に Wiki の操作ミスで記事の中身を消去してしまった場合などがそれに当たる。

このような出来事は、実際 Wiki サイトでは少なからず起こることである。ミスによるコンテンツ破壊は、その Wiki サイトを利用する人数に比例して増加する。規模の大きな Wiki サイトであればあるほど、このような事故が起こる可能性は高くなるのである。では、このような問

題にどう対処していくべきであろうか。

この問題を解決する方法として、Wiki 開発者が書き下ろした本では以下の三つが提唱されている。

- ・ユーザー制御
- ・コンテンツ制御
- ・履歴ログとバックアップ

(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p74,75)

ユーザー制御というのは、ユーザーごとにアカウントやパスワードを認証することによって、Wiki サイトの利用を制限するという手段である。主に Wiki サイトにアクセスすること自体にユーザー認証を必要とする Wiki サイトと、アクセスして閲覧は認証していないユーザーでも自由に行うことができるが、ページの新規作成や、コンテンツの編集などにはユーザー認証を必要とする Wiki サイトの二種類が存在する。

前者は、特定のユーザーしかアクセスできないという点において、二章で述べた企業の Wiki サイトを一例に挙げることができる。後者の、閲覧は誰でも可能だが、編集などにはユーザー認証を必要とするタイプのユーザー制御は、インターネット上にあるオープンな Wiki サイト、特に悪意あるユーザーの攻撃を受ける可能性の高い、規模の大きなサイトに多く使われている。このユーザー制御によって、悪意のあるユーザーの攻撃をある程度防ぐことができる。しかし、この方法は Wiki サイトを利用するユーザーを制限することになり、オープンな Wiki サイトの誰でも閲覧、編集ができるという持ち味を殺すことにもなるのである。この場合、ユーザー登録を簡単にすることによって、オープン性を高め

ることができるが、同じように悪意あるユーザーにも登録、再登録が簡単になってしまう。かといってユーザー登録を厳しくすればオープン性が低下し、元のもくあみである。そしてこのユーザー制御では、悪意のあるユーザーの Wiki サイトへのアクセスをある程度防ぐことができるが、ユーザーの手違いでのコンテンツ改悪など、悪意のないユーザーが起こした問題には対処できない。

ユーザーを制御する他に、Wiki サイトのコンテンツ自体を制御するという方法もある。特定の記事を編集不能にすることで、コンテンツの破壊を防ぐということである。具体的には今のままで完璧だと思われる記事や、元々変更の必要のないコンテンツ、悪戯の多いコンテンツなどを全てのユーザー、あるいはユーザー認証をしていないユーザーが編集できないようにすることによって、コンテンツ破壊を防ぐのである。

しかし、このコンテンツ制御という方法も、誰でも編集できるというオープンな Wiki サイトの原則からは外れたものである。編集を制御することによって、情報を最新のものに更新することの弊害になったり、何よりユーザーたちの活発な編集を行う意欲を減衰させる可能性があるといった問題点も生じてくるのである。よってインターネットのオープンな Wiki サイトにおいては、ユーザー制御とコンテンツ制御はなるべく行わないのが理想といえる。しかし Wiki サイトではやむを得ない理由で、このページ保護を使っているサイトもある。例としてはやはりウィキペディアが適当であろう。ウィキペディアの「保護されたページ」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E4%BF%9D%E8%AD%B7%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>)には保護されているページの一覧とその理由が列挙されている。このコンテンツ制御と、前述のユーザー制御を平行して行うことによって、コンテンツ破壊への

耐性のある程度得ることができる。しかしそれでも、これだけでは Wiki サイトのコンテンツ保護の脆弱性への対処は十分とは言えないであろう。しかもこれらの方法は Wiki サイトのオープン性を低下させるといった副作用をも持ち合わせているのである。

そこで最も現実的かつ効果的な 3 つめの対処法はバックアップである。Wiki コンテンツのバックアップは手動でも、自動でも行うことができる。また、一定期間ごとに Wiki サイト全体のバックアップを行うことも可能であるし、最も理想的であると思われる、編集が行われた時に、そのページのバックアップを行うことも可能になっている。このようなバックアップを行う場合、Revision Control System(「Revision Control System RCS」<http://www.naney.org/comp/rcs/>)などのバージョン管理ツールを、外部で使用するのが一般的な方法である。

この Revision Control System を用いることで、増分バージョンバックアップ機能を利用することができるようになる。すなわち、Wiki コンテンツの編集、更新が行われるたびにバックアップが行われ、編集前の状態を保存することができるようになるのである。そして、このバックアップを利用して、ユーザーが今の記事だけでなく、編集する前の記事も閲覧することができるようになるのである。更に、以前のバージョンから変更された箇所を強調表示することもできるようになる。

Revision Control System 以外にも、バージョン管理ツールは存在するが、RCS はモジュール化されているので設定しやすく、そして多くの Wiki のニーズに適しています(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」p328)とあるように RCS は特に Wiki サイトと相性がよいと言われている。ただ Revision Control System にしろ、他のバージョン管理ツールにしろ、更新時あるいは定期的な自動バックアップによるコンテン

ツの復元。バックアップを利用した、過去の記事を閲覧できる機能、新しい更新を強調表示する機能の、三つの機能を提供してくれるのである（「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」p329）。特に、過去の記事を閲覧する機能と、新しい更新を強調表示する機能は一般ユーザーにも提供される点において、非常に有用な機能とすることができる。そしてこの Revision Control System などの外部ツールによる強力なバックアップ機能は、Wiki サイトのコンテンツ保護の脆弱性という弱点を補強してくれるものであり、Wiki サイトの運営者は必ず導入することを推奨するものである。

これらの方法を利用することによって、Wiki サイトのコンテンツ保護の脆弱性はかなり補強されることになる。ただこれらの方法にはもうひとつの問題が残っている。その問題とは、ユーザーあるいはコンテンツ制御にせよ、外部ツールを用いたバックアップにせよ、それらのシステムを運用するのは、Wiki サイトの管理者だという点である。つまりこれらのシステムを追加することによって、管理者の仕事が飛躍的に増えてしまうのである。

具体的に例を挙げると、ユーザー制御なら新規ユーザーへの新規アカウントやパスワードの発行。悪意あるユーザーを Wiki サイトにアクセスできないようにするために、特定のアカウントをアクセス拒否することなどである。次にコンテンツ制御については、特定のコンテンツを編集不能（保護）、あるいは保護解除することなどが管理者の仕事にあたる。またコンテンツ制御をするかしないか、コンテンツ制御を解除するかしないかなどの判断も、当然管理者の仕事に含まれる。

そして最も管理者への負担が大きい仕事はバックアップツールの運営である。破壊されたコンテンツの修復は最も頻繁に行う作業になるであ

ろう。特に個人で運営しているが規模の大きな Wiki サイトの管理者には、これらの仕事が負担になることは想像に難くない。ここでは Wiki サイトの共同作業という原則に倣って、サイトの管理も可能な限り共同作業で行うというのが理想的な方法であろう。Wiki サイトを利用してユーザーが可能な限り最大限の協力をすることによって、管理者の負担を減らすように努めるべきなのである。具体的には、破壊されたコンテンツ、あるいはコンテンツ制御で保護したほうがよいと思われる記事などを見つけたユーザーは、そのことを迅速にサイトの管理者に報告するだけでも、管理者の負担を減らすことができる。Wiki はコラボレーションツールとして、問題点解決にもユーザー全員で取り組む必要があるといえるのである。実際に「2ちゃんねる Wiki」(<http://info.2ch.net/wiki/>)では、「荒らし報告」などのコンテンツを設けて、ユーザー全員で荒らしなどに対応していくように勤めている点が伺える。

3-2 Wiki サイトの利用用途の考察

誰もが、どのような状況でも Wiki サイトを必要とするわけではないことは前章で述べた。では Wiki サイトはどのような利用目的に特に向いているのだろうか。そして Wiki サイトが必要とされていない場合、他のどのような手段を用いればよいのであろうか。このことを検討する前に、Wiki サイト以外にも、インターネットを利用して共同作業や議論の場を提供するような方法やツールが存在することを知っておきたい。その中でも最も代表的であろう 3 つが Wiki 以外の共同作業ツールの例として本に紹介されている。

- ・メーリングリスト
- ・スレッド型議論
- ・チャットルーム

(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p33)

メールを利用した代表的なコミュニケーション方法にメーリングリストというものが存在する。メーリングリストとは複数のユーザーに同じ内容の電子メールを同時発信する仕組みで、ひとりのユーザーがメールを送信することで、他のユーザー全員に同じ内容のメールが届く。これを利用することによって、メーリングリストに登録されている特定のユーザーの間で議論を行うことができる。

メーリングリストを導入する最大の利点は、メーリングリストを利用する条件が非常に簡単だということである。メーリングリストは、電子メールを送受信することが可能なユーザーなら誰でも参加することができる。その条件は Wiki サイトに匹敵するくらい簡単なものになっている。そのため、初心者にも扱いやすいコミュニケーションツールといえることができる。

しかしメーリングリストは、電子メールを使っている特性ゆえ、一方的な意見の発信が繰り返され、メールがたまっていくだけで、総括性はほとんどないといえるだろう。保存性と総括性を高めるためには、後で議論などをまとめたアーカイブなどを作る必要があり、二度手間ということもできる。そしてこのことによってユーザーの負担が大きくなってしまふ。また、メーリングリストは特定のグループ内で運用されることになるので、オープンな Wiki サイトとは違い、不特定多数のユー

ザーから意見を求めたりすることは難しいともいえる。特定のグループ内での意見交換や議論などには適しているが、それらのログをまとめておく必要がある場合などには、メールでのコミュニケーションは不向きだということができる。

次にスレッド型議論であるが、これは一般に電子掲示板と呼ばれている。サーバー上に CGI スクリプトを設置することによって利用することができる。原則的に誰でも自由に閲覧、書き込みを行うことができ、意見交換などのコミュニケーションを行うことができるのである。代表的なサイトとしては、2 ちゃんねる (<http://www.2ch.net/>) が挙げられるだろう。

このスレッド型議論は、基本的に既存のウェブブラウザのみで利用することができる、敷居が低いということができる。メールとは違い、インターネット上に設置することによって、Wiki サイトと同じように、不特定多数のユーザーの利用を促すことができるのが利点である。しかし、原則的に編集は不可能で、ただ新規のコメントを追加していただくというスタイルのうえ、議論にノイズが混じることが多く、ナビゲートし難い。連結性はほとんどないか、まったくありません。(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p33)と記されているように、メーリングリストと同じように総括性はほとんどないと言える。このため不特定多数のユーザーが参加する議論の場としては適しているが、Wiki サイトのようにデータベースを製作するといったような目的には全く向いていないといえる。

最後のチャットルームは複数のユーザーが、インターネット上に用意された部屋で、テキストの送受信を行い、リアルタイムに議論を行うシステムである。これを用いた代表的なサイトとしては Yahoo!チャット

(<http://chat.yahoo.co.jp/>)が挙げられる。スレッド型議論と同じようにサーバーに CGI スクリプトを設置することによって利用することができ、また同じように既存のウェブブラウザのみで利用することができる。チャットは、究極の双方向的なメッセージ交換手段だと一部の人たちに指示されています(「Wiki Way コラボレーションツール Wiki」 p33)とあるように、少人数、特に二人での議論に関しては最も良いコミュニケーションツールであると思われる。

しかし人数が多い場合、議論がリアルタイムに進行していくため、会話の流れをつかみにくくなるという問題点もある。更にチャットは他の二つと比べても保存性が極端に低い。専用の記録手段を利用しない限り、コンテンツはすぐに失われることになるのである。チャットはその場限りで、保存の必要のない議論などには最も向いているといえるが、それ以外の目的には全体的に向いていないといえる。

では、Wiki サイトはどのような用途に向いているのであろうか。Wiki サイトが、前記したような他のコミュニケーションツールと大きく異なっているところは、Wiki サイトのコンテンツは保存性が高く、さらにコンテンツ間、あるいは他のウェブページとの繋がりも深いという点である。また、コンテンツの編集が可能のため、他のツールに比べてデータベースを製作しやすいという点もあげることができる。

Wiki サイトと相性のよい用途のひとつめはインターネットリンク集である。基本的にリンク集はリンクの数が多いほど有用なサイトになるため、誰でも簡単に編集できる点 Wiki サイトでは多くのリンクが作られるだろうし、切れたリンクの発見や修正などもユーザー全員で行うことができるため、完成度の高いリンク集が作られることになるだろう。

さらに Wiki サイトでは HTML の知識がないユーザーでも簡単にリンク

を作ることができる。このようにオープンな Wiki サイトで不特定多数のユーザーにより作成されるリンク集は利用価値の高いものになる可能性が高く、リンク集の製作という目的は Wiki サイトと相性が特に良いと言える。

次に考えられる Wiki サイトの利用法は議論や批評などのコミュニケーションツールとしての利用方法である。しかし議論を行う場合、人数や状況によっては前述したほかの方法を利用したほうがよい場合もある。特に、保存の必要のない一過性の議論であれば Wiki サイトの利用は必要ないといえるのである。保存の必要のない一過性の議論を行う場合、特定のグループ内で行うならメール。少人数、特に二人きりで行う場合はチャットルーム。インターネット上で不特定多数のユーザーの意見を求めたいときはスレッド型議論と使い分ければよい。

Wiki サイトに向いているのはどちらかといえば議論よりも批評である。不特定多数のユーザーが批評を書き込める容易さと不特定多数のユーザーが批評を閲覧できるという保存性の二つを Wiki サイトは兼ね備えているからである。

そして議論にせよ、批評にしる、インターネットでオープンに不特定多数のユーザーの意見をまとめて保存しておくには、Wiki サイトが適しているともいえる。

最後は Wiki サイトの最大の特徴とも言えるデータベース製作という利用方法である。例としては二章でも紹介した「Wikipedia」などがこれにあたる。広義でいうならば前述したインターネットリンク集として利用されている Wiki や議論や批評サイトとして利用されている Wiki もデータベースの一種といえる。それぞれリンクを集めたデータベース、批評を集めたデータベースということである。不特定多数のユーザーが

簡単にコンテンツを追加、編集することが可能なため、規模が大きく、完成度の高いデータベースを製作しやすい上、コンテンツ間に関係を持たせやすいという点において Wiki サイトと非常に相性が良いといえるのである。共同作業でデータベースを製作するときには、最も向いている方法が Wiki サイトであることは間違いないのである。

以上の3つが Wiki サイトが特に向いていると思われる利用方法である。よってこれらの目的を持っている場合は、Wiki サイトの導入を第一に検討すべきである。しかし、前述したように保存の必要のない議論や特定のグループ間での議論などに対しては、必ずしも Wiki サイトを導入することが歓迎されるわけではなく、前述したような他の方法も検討すべきであるといえるだろう。

結論

これまでに述べてきたように、Wiki サイトは非常に強力なコラボレーションツールであるが、全ての共同作業に Wiki サイトが向いているというわけではない。導入する際には、目的に応じて本当に Wiki サイトが必要とされているのかどうかを検討する必要がある。Wiki サイトが最も得意とし、向いているのは、インターネットを利用した不特定多数のユーザーによる共同作業である。前章でも述べたように、その中でも特に向いているのは、特定のデータベース製作である。このような目的を持つ場合は Wiki サイトの導入を第一に検討するのがよいが、そうでない場合は本当に Wiki サイトが必要とされているのかということと、Wiki サイトではない他のツールの導入も検討する必要があるといえるだろう。

更に、Wiki サイトを導入して運営する際にも、Wiki サイトの脆弱性に対処していかなければならないことも述べた。バックアップツールを利用したり、場合によってはユーザー制御やコンテンツ制御を用いて、サイトの管理者が Wiki サイトの脆弱性に対処していく必要があるのである。また、サイトを利用するユーザーも協力して、Wiki サイトの脆弱性に対処し、管理者の負担を減らすよう努めるのが理想的な Wiki サイトのあり方である。

このように問題点を解決することによって始めて、Wiki サイトは本来の性能を引き出すことができるのである。その時 Wiki サイトはインターネットコラボレーションツールとして、私達にその素晴らしい機能の数々を提供してくれるのである。

参考文献、参考サイト

著書、サイト名/著者、製作者(URL)

- ・ ウィキペディア/ウィキメディア財団
(<http://en.wikipedia.org/wiki/>)
- ・ ウィクシヨナリー/ウィキメディア財団
(<http://ja.wiktionary.org/wiki/>)
- ・ ウィキブックス/ウィキメディア財団
(<http://ja.wikibooks.org/wiki/>)
- ・ ウィキクォート/ウィキメディア財団
(<http://ja.wikiquote.org/wiki/>)
- ・ ウィキソース/ウィキメディア財団(<http://wikisource.org/wiki/>)
- ・ TeX Wiki/okumura(<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texwiki/>)
- ・ 書体関係 Wiki/ (<http://wiki.fdiary.net/font/>)
- ・ PlamoLinux Wiki/ KAWAMATA Yoshihiro
(<http://plamo.linet.gr.jp/>)
- ・ Revision Control System RCS /WATANABE Yoshimasa
(<http://www.naney.org/comp/rcs/>)
- ・ 2ちゃんねる Wiki/サザン(<http://info.2ch.net/wiki/>)
- ・ Yahoo!ニュース/Yahoo Japan Corporation
(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl>)
- ・ Yahoo!チャット/Yahoo Japan Corporation
(<http://chat.yahoo.co.jp/>)
- ・ 2ちゃんねる/ひろゆき(<http://www.2ch.net/>)